

NGOトーク  
理事が聞く

# 人々が本当に必要とする援助を ～ボリビアでのトイレ、生ごみリサイクルの普及～

(特活)DIFAR 国内事務局 瀧本 規久子さん & (特活)名古屋NGOセンター 理事 松浦史典

## エコサントイレを 500個設置

**松浦** どのようなきっかけで始めたのですか。

**瀧本** 娘の瀧本里子が2000年12月から2年間、青年海外協力隊でボリビアに派遣されて、野菜栽培の指導をしました。男性の力が強くて女性が発言力がなく、お母さんは家庭の中で重労働を強いられていました。お金がなくて子どもも学校に行けず、肉が買えないので栄養のバランスがとても悪い食事をしていました。男性は売るための野菜は作るのですが、家庭用の野菜は作らないのです。そのため、子どもが学校に行ったり家族が健康になるように、野菜栽培の指導をしていました。

日本に戻ってからも、自分で何かやれることはないかと考えて、友人や知人に自分の気持ちを伝える報告会を何回も行って支援金をいただき、4ヶ月後にボリビアに戻りました。そこで病院で子どもが目の前で死んだのを見たそうです。汚れた川の水を飲んで感染症にかかり、貧しくて薬も買えずに亡くなりました。そういう子どもたち

を何とかしようと思い、エコサントイレを普及することを思い立ちました。便と尿に分け、便は灰を上から掛けてアルカリ性にして堆肥にする仕組みです。セメントのように無色でサラサラの堆肥になるのです。

**松浦** そのトイレができる前は どうしていたのですか。

**瀧本** 川岸や木陰などで済ませていたようです。乾季はすぐ乾燥するからいいのですが、雨季は汚物が流れて感染源になってしまいます。実は外国のNGOも水洗トイレの設置を支援していたのですが、流す水がないとか、トイレを作るだけで使い方を教えなかったとかで、ほとんど活用されていませんでした。

ですからトイレを作りますといっても、現地の人はピンとこなかったようです。トイレの文化がなかったのですから。堆肥になることを伝えたら興味を持ってもらえました。数個作っただけでは効果はありません。そのため川沿いの9つの村の8割にあたる500世帯にトイレを作るという目標をたてました。

**松浦** すごいですね。

**瀧本** 娘の里子からそういう提案があっ

た時には驚きました。500基のトイレなんて資金をどこから出せるのかと。社会貢献に力を入れている東京の社長に直訴したり、国際ボランティア貯金の配分金を活用したりして、なんとか5年かかって511基設置しました。

トイレの文化がないので、使ってもらうために講習会を7回受けてもらいました。識字率が低いので紙芝居を作って、トイレを使ったらどんなにいいことがあるか、川がきれいになると病気になるし肥料もできる、など説明しました。一番気を付けたのはお母さんの負担が増えないようにすることです。トイレ掃除をお父さんや子どもたちも分担することも伝えました。

**松浦** 成果は出せましたか。

**瀧本** トイレを設置した家庭を回るフォロー調査をして、きちんと使っていることを確認をしています。特に女の子は、今までは人目を気にしていたのですが、落ち着いてできるようになったと好評でした。トイレに行った後は手を洗うという衛生教育はなかなか直接大人には伝わりませんでした。が、小学校で子どもに伝えて、それを子が親に伝えて家庭の習慣が変わりました。

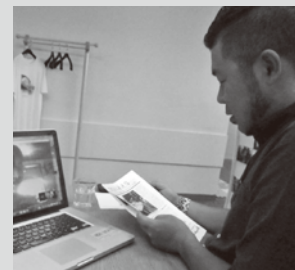


エコサントイレを囲んで

DIFAR(ディファル)とは、ボリビアで使われているスペイン語 Desarrollo Intergrar de la Familia Rural「農村生活の総合的な発展」の頭文字だとか。お話を伺ったのは、自給自足的な田舎暮らしを求めアイターンをした、三重県の中山間部の美杉町で農林業を営む瀧本規久子さん。ボリビアで活動する瀧本里子さんのお母さんです。アフリカなどで生活支援をしているホープインターナショナルの職員でもある、名古屋NGOセンター理事の松浦史典がお話を伺いました。



たきもと きくこ  
瀧本 規久子さん



まつうら 史典  
松浦 史典

## 生ごみのリサイクル

**瀧本** 現在は生ごみのリサイクルに取り組んでいます。エコサントイレで堆肥を作ったのですが、便に病原菌が含まれていたら畑にまくことで感染が広がってしまいます。70℃以上にすると病原菌が死滅するので、生ごみと人糞堆肥を混合して発酵させました。ボリビアは生ごみをそのまま空き地に捨てていたため、悪臭が出るのが問題になっていました。そのため市役所の協力も得ながら、国際ボランティア貯金により堆肥場を設置しました。

**松浦** 市役所を巻き込んだのがいいですね。

**瀧本** 33年ほどたって、現在活動しているバジェグランデ市の市長からオファーがありました、「JICAに申請はしますが、まず自分たちで始めてください。」とお願いしました。実際、活動開始までの2年間自力で生ごみ堆肥づくりを始めていました。

JICA技術協力事業(パートナー型)の内定はいただきましたが、それからが非常に大変でした。DIFARが国内で活動する

ことを承認するボリビア政府のNGO登録(AMBCB)が必要なのですが、日本のNGOを登録したことがなかったため、その手続きだけで丸2年かかりました。また施設を設置する際も、耐震構造とか強度試験とか公共入札など専門用語ばかりで、建設の知識がない私たちには理解が難しいものばかりでした。JICAの方も小規模なNGOが建物を建てる事例があまりなく、対応に苦慮していたようです。

リサイクルセンターは2014年2月に完成し、順調に生ごみをリサイクルしています。バジェグランデの皆さんはとてもよこんでいますね。施設の管理はDIFARですが、建物の所有を市役所に移管する手続きを進めています。市役所にそのための課ができています。

## 国内での活動

**松浦** 親子で活動されていますが、珍しいですね。困ることとかいい点とかありますか？

**瀧本** 珍しいですか？困ることはいつば

いありますね(笑)。娘の里子は事業は熱心なんですけど、お金のことは無頓着で、領収書の整理などでは親子喧嘩しましたね。良かったことは、親子一緒に同じ事業に取り組んでいることです。遠くボリビアに離れていても身近に感じますよ。

**松浦** 国内での活動も紹介してください。

**瀧本** 毎年「森の音楽祭」というイベントを地元的美杉町で行っています。鉄道(JR名松線)も2時間に1本しかない過疎地ですが、地元に何とかかかしたい人たちと一緒に、南米音楽や地元の音楽で歌って踊るコンサートを開いています。

また、美杉町出身の元協力隊員の女性がDIFARに最近かかわってくれるようになりました。その方は福祉に関心があり、美杉町の高齢者と、都会の学校に行けなかったり就職できなかった子どもたちとを結びつけることをしたいそうで、DIFARとしてもその活動を支援する予定です。

**松浦** どうもありがとうございました。

(担当:丹羽)



リサイクルセンター(写真中央が瀧本里子さん)

ボリビアの里子さん、三重の規久子さん、聞き手の松浦理事の3人が、ハングアウトによりビデオ通話する予定でしたが、当日ボリビアの通信状態が悪いため、規久子さんとの2者対談になりました。

### 団体概要

#### (特活)DIFAR

〒515-3421 三重県津市美杉町八知1383

TE&FAX 059-212-0154

Email: info@difar.jp HP:http://difar.jp/